

生活を支える「守り」の医療

— 2025年モデルへの選択と集中 —

笠間市立病院 石塚恒夫

昨年末、当院の建て替えを検討するため、病院建設協議会が開催されました。そこで、「在宅医療を軸とし、それをバックアップするための病床（ベッド）を持つ」という方向性が示されました。当院では訪問診療・訪問看護（リハビリ）等を担い、

状態の悪化を未然に防ぐ医療を推進します。また急性期病院から急性期後の在宅医療や、施設から軽度急性期の脆弱高齢患者を受け入れ、できるだけ早期に生活の場に戻すことを使命とします。

2025年には団塊の世代がすべて後期高齢者（75歳以上）となり、それに対応するモデルづくりが必要となります。病床機能の分化と連携もその一環であり、当院の方向性もそれに沿うものです。高齢になると治りきらない慢性疾患を複数抱え、入院を繰り返します。入院のたびに階段状に活動性が低下し、やがて避けられない死を迎えます。このサイクルを未然に防ぐのが在宅医療であり、回ってしまったサイクルを滞ることなく

回し、速やかに生活の場に戻すのが地域包括ケア病床です。

慢性疾患の多くは生活習慣に起因し、その悪化にも生活習慣が関与します。患者さんの生活を注意深く観察することで、急性増悪を防ぐヒントがみつかります。また高齢者入院医療では治療（キユー）は困難であり、しかもそれだけでは不十分です。キユーの中にも生活を意識し、生活に戻るのに何が必要かを考えリハビリ等（ケア）を並行させることが必要です。

今まで当院は入院・外来・在宅のそれぞれで役割を果たそうとしてきたわけですが、いずれも中途半端な存在でした。これからは在宅医療にシフトし、入院・外来も在宅医療を支えるためのものに変えていく必要があります。物忘れ外来などもキユーに固執することなく、問題行動を抑え家族の負担を軽減するケアを優先しています。そして小さな病院であっても、地域の中で大きな役割を果たしていければ良いと考えます。

笠間の歴史探訪 16

養福寺の元治甲子之変
殉難碑

笠間市大田町の養福寺境内に、水戸藩天狗争乱で犠牲となった穴戸藩主松平頼徳と家臣62名の殉難碑があります。この石碑は、明治五年（一八七二）三月に建てられ、撰文と書は穴戸藩校脩徳館教授であった川口翊宸の手によるものです。

天狗争乱は、元治元年（一八六四）、藤田小四郎・竹内百太郎ら50名ほどが、尊王攘夷を唱えて筑波山に旗揚げしたことに始まります。天狗党は筑波山から、日光・大平山（栃木県）に移り、再び筑波山へ戻ってきました。その間、田中愿蔵らの一派が、金銭を強要して栃木町（栃木県栃木市）や真鍋（土浦市）を焼きました。

幕府は天狗党追討軍を組織して、常総地方（茨城・栃木）に派遣し、諸藩にも出動を命じました。追討軍の総督は、若年寄の田沼尊意で、高道祖（下妻市）や下妻で最初の衝突があり、天狗党が勝利しました。この戦いに敗れた諸生派の市川三左衛門らは水戸城を固めました。

水戸藩主徳川慶篤は、幕府の要請もあり、支藩の穴戸藩主松平頼徳を名代として、天狗争乱を鎮めるため水戸に下向させました。頼徳は八月四日水戸に向かい、十日水戸台町の薬王院（天台宗）に入りましたが、

水戸城への入城を拒否され、やむなく那珂湊に移りました。幕府の追討軍は、本陣を笠間月崇寺から水戸弘道館に移し、那珂湊の天狗党を攻撃しました（那珂湊戦争）。

頼徳は、争乱を鎮める責任を果たせなかったため、一旦江戸に帰って報告しようとしたが、那珂湊を離れたが、その情報を掴んだ幕府側に西郷地（小美玉市）のあたりで捕らえられ、水戸に連行されました。幕府は頼徳を「賊魁」として処断し、穴戸藩を取りつぶして藩主の頼徳に切腹を命じました。

頼徳の刑が執行される十月五日早朝、頼徳は切腹に先立って辞世の歌をしたためました。

思いきや野田の案山子の竹の弓
引きもはなで朽ち果てんとは

天狗争乱の穴戸藩の犠牲者は、60名を越えました。今年は、天狗争乱から150年に当たります。藩主をはじめ、藩士・領民たちの供養をしたいものです。

（市史研究員 南 秀利）



養福寺殉難碑